

連載

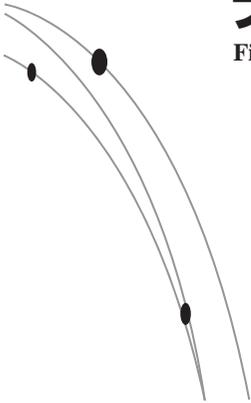
フィールド・アイ

Field Eye

イギリスから——③

神戸大学 櫻庭 涼子

Ryoko Sakuraba



食と安全と職業の教育

イギリスを語るうえで欠かせないポイントの一つは、食事の質だと思われる。味について一般的にその評判は芳しくないが、学校での食育は一体どうなっているのだろう。

知人への聞き取りの結果分かったのは、学校給食はここ5年くらいの間にずいぶん改善したということである。その最大の功労者、ジェイミー・オリヴァー (Jamie Oliver) は、テレビの料理番組で有名な料理研究家である。彼が提案するレシピは難しいものではない。基本を押さえつつ、ただほんの一手間加えるだけで、見た目も味も楽しめる料理ができる、それによって人に健康や幸せをもたらすことができる、と伝えたいのだと思う。そのレシピや率直・明朗な人柄が受けるのだろう。彼の人気は絶大であり、筆者がこれまでイギリスで訪れた家庭ではすべての家で彼の料理本が書棚に取まっていた。

その彼が、2005年に「もっといいご飯を食べさせて (Feed Me Better)」キャンペーンを始めた。テレビ番組で各地の学校給食を映し出してその質の低さを訴えかけ、政府の財政支援や給食調理人の教育訓練を求めて署名を集めたのだ。賛同する署名は27万を超えたという。これに応じて政府は基金 (School Food Trust) を創設して給食のガイドラインも発表し、チョコレートなどのお菓子を出すことを禁じ、揚げ物の回数を制限するなどした。2007年には、たん白質やビタミンなど個々の栄養素について給食に含まれるべき一定量を定めた。脂肪などの摂取量については上限を設けた。

安全教育については、知人に見せてもらった小学校

低学年の子供の宿題の中身に感心した。家で電気製品を取り扱うときにどのような点に気をつけなくてはならないか、ほかの児童を啓発するためのポスターを描いてくるように、という宿題である。ポスターを描くということだから一見美術の宿題のようである。しかし立派な安全教育になっている。留意すべき点 (水と電気が接触すると危険なので濡れた手で電気製品に触ってはいけない、など) の情報は、各人が、事前に示されたウェブサイトアクセスすれば得られる。しかしただ紙に書いた安全情報を手渡され、読むだけで終わるのは違って、子供たちが主体的・能動的に学ぶことが可能になると思われる。いろいろな情報の中からポスターの題材にどれを用いるか取捨選択したうえで、絵をつけてわかりやすく説明しなければならない。その過程で、内容への理解が促進される。得た知識も、自分が生きるための大切なものとして後に残りやすいだろう。

なおイギリスは電気や水などの安全性確保・防災対策に力を入れているという印象を受ける。たとえば家を貸している大家さんは、さまざまな規制に服することになる。プラグを差し込む電化製品は年に1回、火災報知機は1週間に1回、点検しなければならない。その点検記録を保存する義務もある。シャワーのノズルは3カ月に1回、点検しなくてはならないが、これはレジオネラ菌の繁殖を防ぐためだそうである。

食と安全という生きるための基本の次に学ぶべきは、自分の能力を發揮できる職業は何か、ではないだろうか——ということで、キャリアパスに関するウェブサイト、[icould](http://icould.com/)についても紹介しておきたい (<http://icould.com/>)。

このサイトでは、さまざまな職業に就いている人たちが自身のこれまでのキャリアについて語る3分間から4分間くらいの動画 (その数は千を超える) を視聴することができる (制作しているのはCRACというケンブリッジに本拠地を置く会社である)。学校で、あるいはキャリア指導の際などに用いられているのである。

法律関係の職に就きたいと思うなら、このサイトの数ある職業分野の中から、Law and Order というカテゴリーを選んでみよう。そうすると、ソリシタ (solicitor. 事務弁護士)・バリスタ (barrister. 法廷弁護士)・裁判官などの職に就いている人たちのリストが並んでいる。あまり知識を持っていない人は、ソリシ

タとは何か、といったことを調べるところからスタートするだろう。次に、それぞれの人が語る内容を聴き、キャリアパスのあり方について学ぶことになる。あるソリシタは、実務修習の契約に至るのが難しかったこと、そのため就労経験を積むためにスペインまで行って法律事務所が無償で働くことにしたことなどを動画の中で語っていた。ソリシタとして働くために実務修習が必要になるという基本的事項を把握するきっかけを与えてくれている。

視聴する側の年齢や状況によって心に響くポイントは異なりうるが、現在のキャリアへ向かう道を迷いなくまっすぐ進んできた人ばかりではない、というメッセージは伝わってきた。あるソリシタは、大学1年生のときに演劇という当時の専攻が自分には合わないと感じた。そこで高校時代の先生と相談し、別の大学の法学部に入学しなおすことを決意した。ソリシタとなった今はメディア法を専門にしている。この例からは、自分に興味関心のある事柄が複数あるとき、1つ（この場合、法律）を職業として選んだとしても、ほかの事柄（この場合、演劇）に関心を注いでいたことは無駄にならず後で生きてくることがある、という教訓を学べる。ある裁判官も、最初は理系に進んだが挫折し、投資関係の職に就くもうまくいかず、その後バリスタをめざすことになった、と動画の中で語っている。つらい時期があったからこそ今の職が自分にとっていかに適切なものか実感することができる、という彼の言葉は、人生の方向転換を考えている人にとって大いなる励ましになりそうだ。

現在の仕事をするうえでの困難などの話題がもっと含まれていてもよいのではないかと感じたが、それはインタビューを受ける側が顔を見せ、実名を明らかにして臨んでいるせいかもしれない。具体的なことは、知り合いなどに話を聞き、自身で経験する中で学

ぶことが期待されている、ということもあるだろう。

このサイトを通じて分かることは、一言でいうと、社会には思いつかないような仕事も限りなく存在し、そこへ至るキャリアパスも一様ではないこと、に尽きる。ただ、情報が整理され、提供されているわけではない。手とり足とり上から教えるのではなく、視聴者側が、数多くの生きた実例を視聴する中で、手探りで学んでいくことに、このサイトの醍醐味があるのではないかと感じる。小学校低学年の児童に対する安全教育も、成熟した者に対するキャリア指導も、隔々まで丁寧に教え、覚えさせるのではなく、素材を与え、それをもとに自分の頭で考えて答えを見つけさせることに重点を置いている——それがイギリス流の教育なのかもしれない、と思える。

思考能力の涵養を重視する教育方法に、マイナス面がないとはいえないだろう。教えられる側の能力・適性しだいでは、教育による効果が一向に挙がらない事態もありうる。基礎的知識も身につけていないのに、水準の高いことを要求されても、わけのわからないまま時間だけが過ぎるかもしれない。教えるべき内容も定めにくいので、学校ごと、教員ごとにばらつきが生じる。教える側の能力しだいでも、十分な教育が確保されない場合も出てくる。しかしやはり、個人の力を信じるイギリス流の教育があってこそ、冒頭に挙げたジェイミー・オリヴァーのように、政府を動かし、社会を変える力のある個人が現れるのではないかと——筆者が抱いた感想を書き留めた。

さくらば・りょうこ 神戸大学大学院法学研究科准教授。
最近の主な著作に『年齢差別禁止の法理』（信山社、2008年）。
労働法専攻。